

幻魔大戦 Ⅸ

青い、暗黒

平井和正



角川文庫

げん ま たいせん
幻魔大戦 9

ひらい かずまさ
平井和正



角川文庫 4802

昭和五十六年一月三十日 初版発行
昭和五十七年七月三十日 五版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三—三

電話東京二六五—七一一(大代表)

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——千曲堂製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-138323-0946 (○)

幻魔大戦 9

青い暗黒

平井和正



角川文庫 4802

もう時間がない、時間がない、時間がない……

マントルピースの上に置かれた置時計が、執拗に繰返し続けているように聞こえた。

無表情で無機的な、単調なセコンドが、ひどく切迫した訴えとなって耳についてしまってから、しばらく経つ。

歳末となり、一九六七年が最後の秒読みの段階に入ったこととは無関係であった。置時計の音が耳につきだしたのは、たしか十一月ごろである。

最初は何で時計のセコンドが「時間がない」と訴えるように聞こえるのか、わけがわからなかった。もともとセコンドの音がやけに大きな置時計なのである。大理石できていて、クラシックな文字盤には翼を広げた天使がいる手巻き時計である。

その天使の顔がなぜか東丈に見える。銀座の服部時計店で見つけた時、どうしても欲しくなつて、無理やり買ったものだ。丈にプレゼントするつもりだったが、結局贈る理由も見出せず、手離せなくなつたこともあつて、手許に置くことにしたのだ。女子高校生が友人にプレゼントするような気易い代物ではなかった。郁江に甘い父親もさすがに洩面になり、躊躇したほど高価な輸入品だ。

そのお気に入り、の置時計が、郁江に向って“時間がない”と執拗に告げ続けている。

初めは氣にもとめなかった。十七歳の少女にとり、時は無制限に存在するものである。自分が無常の人生を生きていると実感することは困難である。

今の郁江には、置時計の警告が自分の生命についてなされていることがはっきりわかる。自分の生命だけでなく、この地上の一切について告げているのかもしれない。

“もう時間がない”と聞こえ始めたのは、体の変調に気付く以前からだった。自分にもはや時が残されていないと悟るより前からだった。

もしかしたら、自分の未来を予知していたのかもしれない、と郁江は思う。さもないと、時計のセコンドはただ単調に音高く響きわたるだけのはずである。

従姉いとこの慶子けいこが十八歳で、子宮癌しきゅうがん——というよりは卵巣癌の大手術を数回行なった挙句、内臓をほとんどくり抜いたようになって亡くなったのは三年前のことだった。他にも子宮・卵巣癌の手術を受けた身内が三人いて、一人を除いていずれも他界している。子宮癌のみでなく、身内には癌で他界した者が多い。“癌まき”と呼ばれる血統であるらしい。

年齢的にも近く、親しかった従姉の急死は当時中学生だった郁江に異常なショックを与えた。

自分もいずれ卵巣癌で死ぬのではないかという強迫観念がしばらくの間、郁江を虜とりこにしていた。死んだ慶子は、郁江と非常に体質が似ており、容貌から体格まで酷似していたからである。

まだ若すぎたし癌ノイローゼになる性格でもなかったが、慶子の発病から死に至る短い経過は

詳細に心に灼きついていた。もし自分が慶子のように発病したならば、絶対に手術だけは受けまいと決心を固めていた。従姉の場合、内臓ごと腹の中をくり抜くような大手術にも拘らず、いたずらに苦痛を長びかせるためにのみ、わずかに延命させたにすぎなかった。

自殺した方がどんなにましかもしれず、郁江は以来、睡眠薬をこっそり蓄めはじめたほどだった。男に生れればよかったとくやむほど行動力に恵まれているので、あっさりと死ぬ自信は充分にあった。

この十一月に変調が始まった時、いよいよ来たなと思ったものの、不思議なほど恐怖感はなかった。死はさほどの現実感を持たず、遠方を吹き荒れている嵐あらしのようだった。

東丈の秘書役を務め、彼の描く軌跡に興味を持ちすぎていたせいかもしれない。昔から醒めやすく、どこか投げ遣りな性格の郁江には珍しく、東丈のやることに熱中していたのである。

不正出血が続き、その経過は従姉の慶子と恐ろしいほどそっくりであった。従姉も若い女性というよりはまだ少女の年齢にあり、専門医にかかることを忌避し続けて、その挙句手遅れになったのだ。生殖器系統の病気は、少女にとっては両親に対しても告げることを躊躇ためらわせる性質のものである。

慶子がそうしたように、郁江もまた病状を徹底的に秘匿ひとくすることに努めた。母親との間には抑圧された敵意ともいえるべき緊張関係が存在し、日頃から疎遠なので、感付かれることはなかった。いかに不仲とはいえ、一つ家に住む母親である以上、病状を知られれば、病院へ送られること

になるだろう。父親は母親とは反対に、徹底的な偏愛を娘の郁江に示している。

“もう時間がない”とささやく置時計の秒読みの意味がようやくわかって、死んだ従姉が教えてくれたのではないかと郁江は迷信的な考えに捉われた。

残り少ない時間をどうするか、彼女は真剣に考えた。生れてはじめて真剣になったような気がするほどだった。

しかし、特にこれといった考えは生れず、体力がなくなるまでは丈の仕事とつきあおうと決心するにとどまった。特に変わったことはしない。秘書の仕事も容易ではないのである。

乏しい残り時間をより有効に使おうと郁江が本気になると、時間は濃厚に流れ始めた。これまでさらさらと無抵抗に指の間をすり抜けて流れ去っていた同じ時間とは思えなかった。

やることはいくらでもあるのである。与えられる仕事ではなく、自ら探しだす仕事は比重が重く手応えがあるように感じられた。

どこかで見かけた“一日一生”という言葉がありきたりの凡庸な格言ではなく、恐ろしいほどの意味を持ち始めていた。時間に比重の軽重を与えるのは、自分自身の目的意識であり、仕事をなす意欲だという真実を実感できるようになった。充実した多忙な一週間は振返ると一か月にも一年にも感じられるのだ。

だらだらと無為にすごす時間が、その当座は恐ろしく悠長に長く感じられるのに、過去になつてしまえば瞬く間であるのと、同じ根を持った時間感覚に違いなかった。

郁江がこれまで味わったいかなる時間にもまして、一瞬一瞬が新鮮なものと化した。黒雲が地平線から広がってくるように、重苦しい恐怖を未来に意識しないわけではなかったが、多忙さの中でその圧迫感稀釈されてしまふのだった。

まったく丈の秘書役は、いくらでも仕事を発見することができたからだ。受動的に命じられたことをこなすのではなく、己れから見出し関り^{かかわ}あおうとする以上、普通では考えられないほど細々とした仕事ができる。丈宛の問合せの手紙を整理し、代筆するだけでも、うっかりすると一日仕事であり、自宅へ持ち帰って深更に至るまで続けなければならなかったからだ。

しかも、そんなことは丈の感謝をことさらに期待するような類いのものではない。郁江は他に献身することが可能な自分を見出してひどく驚いていた。そんなことは利己的な自分には決してありえないと信じていたからだ。

献身、自己犠牲……そんな言葉は自分にあまりにもそぐわず、照れくさく、恥しいことだった。郁江にはむしろ男の子のような偽悪的な^{きようごう}倨傲が存在した。昔から「良い子」にはなれず、そうあらうと考えただけで死ぬほど恥しくなってしまうのだった。

世の中に偽善ほど厭なものはない。口先だけの道徳家ほどとましく、憎むべき卑怯者はまたとなかった。うわべだけの「良い子」になるよりはむしろ、利己主義に徹底した冷酷な乾いた人間でありたかった。

だれもが人間は我身可愛いエゴイストなのだ。ならば、それを昂然^{こうぜん}とかざして生きる方がはる

かにましであった。体裁だけをとりつくろった偽善者にだけは絶対にならない。

東丈とつきあったのは、彼の正体を見抜いてやろうとする息ごみがあったせいである。丈の説く言葉に影響され、帰依したわけではなかった。それは丈に対してはつきりと告知していることである。

丈の人間的内容については、いつも疑念をたっぷり持ち、検討を怠らないできたつもりだった。丈の秘書役を買って出たのも、彼を崇拜し、献身の衝動に駆られたからではない。丈の身近にいれば、必ず彼の正体を看破する機会があると思つたからだ。他の女の子のように魔^ま蠱^ごにかつたような、憧憬^{どうけい}の霞^{かすみ}のかかった目ではなく、意地悪な透徹した目を決して失わないつもりだった。

その点は丈に断わつてあるので、少しも陰湿であつたり陰険であつたりすることはないはずだ。郁江はいたって正直な気質であり、陰険にはなろうと思つてもなれなかった。

献身など生来、自分には無縁と思ひこんでいたが、そうではないことを郁江はすぐに発見した。それどころか、献身はひどく居心地がよく、自分の性に合っているのである。

もともと飽きっぽい性格なはずが、献身するとなると、集中力はいっかな衰えず、いくらでもエネルギーが湧出してくる。郁江をこれほど驚ろかした発見はなかった。自己の利益のためであれば、とうてい精力が続かない仕事である。もしアルバイトの賃仕事であれば、自宅へ持ち帰り、深更に至るまでせつせと単調な仕事に打ちこんだりするはずがないのだ。

他者への奉仕だからこそ長続きするのだった。献身というのは、人間をもっとも活性化する仕組かもしれないと郁江は思った。彼女自身、思いこんでいたようなエゴイストではないようだった。他者への奉仕に情熱を燃やすのは、エゴイストとはもっとも遠地点にある行為であらうからだ。

だからといって、丈に対する懐疑的態度は捨てていない。頭から無条件で人を信じることは、彼女にはできなかった。そんな行為は不誠実だと思ってしまうのだった。

久保陽子たちのような絶対の帰依を熱烈に誓い、丈を不可侵の聖地に置き、神と父親の中間に祀り上げておきながら、気が変るとほりだしてさっさと立ち去ってしまうのは、誠実に欠けている。相手が自分の勝手に造りあげた幻想に合致しないからといって失望するのは身勝手だ、と思ってしまうのだった。

だいたい相手のことをよく知らずに熱を上げ、崇拜するなんてどうかしている。軽率さの極致ではないか。

相手の長所も短所も見きわめないうちから、神の座に祀り上げてしまうなど、阿呆あほうとしかいようがない。東丈は確かに興味深い男の子であり、特別な「力」の所有者ではあるが、丈は自分が神聖不可侵の存在であることを少しも証明していないのだ。

一度は熱烈な帰依者でありながら、丈から離れ去ると掌返てのひらしたように彼の悪口をいいだし、自分の与えた神性を剝脱はくだつする人間を、郁江は軽蔑した。

自分は懷疑主義者であり、そのことで激しい非難を受けたし、丈の身边から遠ざけようとされ、強く疎外もされた。ところがもともと懷疑的な自分が丈に献身を惜しまず、かつての熱烈な帰依者は、丈を魔王呼ばわりし、悪口の限りを尽している有様であった。

久保陽子はそうでなかったかもしれないが、一見熱心な帰依者は、実は献身などなにもしていなかったのが事実である。ただ時間を無用なお喋り^{しゃべ}りで浪費したにすぎず、丈にとっては無為そのものであったはずだ。

今となつては、丈の敵対者にまわつたかつての帰依者たちへの腹立たしさもなくなったが、当時は冷徹であるべき懷疑主義者としては、ずいぶん激昂を覚えたものだった。丈に対して知らぬうちに感情移入を遂げ、肩入れをしていた証拠であらう。

むろん、郁江は今でも懷疑主義を失つたつもりはない。それは丈への愛情とは次元の異なる、基本的な彼女の生き方なのだ。いつも冷静さを失うことなく観察を続けざるを得ない。丈の言動に少しでも、胡乱^{ぐわん}なところはないかと神経を張り詰めている。

なぜそこまで疑わなければならないのだらうと思う。しかし、いつでも異議申立ての権利を留保していたのだ。それが自分の任務でもあるかのように感じているのかもしれない。

郁江の冷やかな懷疑主義は、最初からずいぶん会員たちの非難を浴びた。異分子どころか裏切者扱いされ、白眼視を受けてきた。そのために彼女自身、意地になつてしまったのかもしれない。東丈が偽善者でないことを明らかにするまでは、決してなにも信じまいとしてきた。そのため

に、丈が落ちた偶像であること^{フオーリン・グ・アイドル}をあげてやろうと決心でもしているかのように、郁江の目は容赦ないものと化していたようである。

自分の仮借ない批判の目に堪えれば堪えるほど、丈は本物としての輝きを増すのだ……と彼女は使命感をすら抱いていたのかもしれない。

むろん、郁江の心は、単純な言葉に還元できるほど筋が通ったものではなかった。矛盾し、分裂していた。時として、自分で自分の心がわからなくなってしまうのだった。ある時は疑いながらも信じている。またある時は、丈に対して自分に信じさせてほしい、と必死な切望を抱いていた。信じたいのだが、信じられないのだ。自分の裡に強固に居座っている懷疑心を圧倒する強さを丈に求めて止まないのだった。

そして、今となってさえ、郁江は疑いの気持を完全に消し去ったとはいえない自分を知っていた。

真冬の寒空に、部屋の窓が開け放しにされているので、室内は戸外同様に冷えきっている。

木枯しが冷暗の闇から喚声をあげて乱入してきては、カーテンを鳴らし、棚に並んでいる小物をカタカタ鳴らした。

異臭が鼻についてしまって、部屋にこもった空気が我慢ならないのだ。それで真冬の冷寒にもかかわらず、窓を開放しておかずにはいられない。

寒冷は嗅覚を麻痺^{まひ}させてくれるので、暖房はつけない。ノイローゼかもしれないが、異常感覚が生じていて、己れの肉体が発している異臭が嘔気^{はきけ}を催させるのである。

肉体を蝕んでいる癌の腐臭がはっきりとわかる。

家族は部屋に入れないので、郁江が冷えきった自室でなにをしているか知らない。彼女が凍え^こたようになって、身辺整理をしたり、遺書を書いたりしているとは知らないのである。

夜衣^{よぎ}の上に部屋着を羽織ったただけなので、寒さは堪えがたいほどきびしい。しかし、肉の腐敗した異臭を嗅^かいでいるよりは、はるかに清冽^{せいれつ}で心地よかった。

置時計が相変らず「時間がない」と切実に訴え続けている。遺書を書くのがはかどるのは、このささやきの督励のおかげに違いなかった。

死が真近に来ていて、待機しているのが感じ取れる。

市枝^{いちえ}、明雄^{あきお}の姉弟^{きょうだい}は毎日来訪して、治療を続けてくれている。効果がないわけではない。下腹部の裡にある巨きな癰^{しと}りは、心なしか縮小したようである。自分の手で触^ふってみても、それとわかる変化がある。

しかし、顕著な変化が見られたのは初日だけであり、後は一進一退の病勢が続いているのだ。明雄が生体エネルギーを注入した直後は確かに調子がよくなるし、手で腹をさわってみても癌細胞組織が縮小したことを実感できるのだが、一晩とそれは持続されない。翌朝になれば、また元通りになってしまうのだった。

明雄姉弟が一生懸命やってくれていることは疑いもないが、これ以上好転するという望みは持てなかった。悪液質の段階に入った卵巣癌を連日の生体エネルギーの注入により、抑制しているというのが本当のところだったのだろう。もし、心霊治療を中止すれば、すかさず病勢はぶり返し、郁江は二か月と生きられないはずである。

一度死を覚悟する心境に到達した身にとってみると、生と死が一進一退の綱引を演じている有様は煩わしい限りであった。郁江の裡には生き延びようとする強い意志が欠けていた。死に対する恐怖が他人ほど強くないらしいのである。欲望については淡泊な性格であり、もういいやと思ってしまうのかもしれない。

振り返ってみると、自分の人生にはこれだけは石にしがみついても生きていたいという執着がない。面倒くさくて、虚ろだったような気がする。ただ一つ、東丈の行く末を、もう少し長生きして眺めていたいという気分がある。

しかし、彼の秘書として務めるという燃えるような執念はなかった。もともとそんなものはなかったのかもしれない。

素晴らしいプロの秘書が丈についたと聞けば、なおさらのことだった。もう自分のなすべきことはなくなった、とさざりと思ひこんでしまうのだ。嫉妬が皆無とはいわないが、それで苦しむことはない。

昔から自分は虚無的きよむだと思い、人にいわれもしたが、本当は虚無的なのではなく、欲望が薄い

だけなのかもしれなかった。何事によらず、飽和するのが早いのだ。

むろん、それほど物事は単純ではなく、もっと屈折しているに決っているのだが、世の中にどうでもいいことばかりが多いという点では共通していたかもしれない。丈の活動にしても、もう充分つきあったので、ああ面白かったですんでしまったといえないこともないのである。

父親が、郁江を一刻も早く入院させ、手術を受けさせるべく腐心しているが、これほど煩わしく迷惑なことはなかった。衝動にまかせて本当のことを告げなければよかったと悔んでいるほどだ。

久保陽子のことは、今でも馬鹿だと思っている。同情は感じているし、憎んでいるのではないが、やはり愚劣だと思ってしまう。

それほど執着が強いのなら、丈にへばりついて離れなければよかったのだ。だれも陽子を丈から遠ざけ、追い払おうと策謀したわけではない。勝手に嫉妬の虜になり、被害妄想で苦しんだ挙句、会を出て行ってしまったのだ。

きつと陽子は、側近第一号の座を奪おうとしている（！）郁江たちを憎み呪い、それを制止しようとしないうちさえも恨んだに違いない、と思えるのである。

陽子が特に自分に対して激しく嫉妬したと知って、郁江は驚いた。彼女ははっと人目に立つ愛くるしい美貌にもかかわらず、ナルシズムというものがない。陽子が自分に対して狂うほど嫉妬するという気持が、やはり郁江にはわからない。

郁江自身、新しいプロの秘書、杉村由紀すぎむらゆきに対して、まったく嫉妬がないというわけではないが、陽子のように自己破壊的な行動に走るまで追い詰められる心境が、どうしても理解できないのである。

一方的に嫉妬し、丈の関心を奪いあうこともせず、逃げるように一人で離れ去って、自分を滅茶滅茶ちやちやにしてしまうというのは、郁江の理解を超え、気違い沙汰ざた以外の何物でもないような気がする。

気の毒だと思い、憐愍れんぴんを覚えないわけではない。しかし、その前に、女の妄執もうしゆちうだとか業だとかぞっとするような言葉が浮んでしまうのだった。

そして、あれこれ考えるのも煩しく、面倒になってしまふ。自分はたぶん、薄情なのだろう、と彼女は思うのだった。

何事によらず、深く関与するのが厭で、どうしてもよくなってしまう。たぶん、薄情で無感動なのだ。

生きるということさえ、どうでもいいと昔から思っていたからだ。陽子がこんな自分のことを知っていたら、嫉妬妄想の虜になるなどありえなかったろう。郁江は陽子と異り、東丈を独占したいと露ほども思っていなかったからだ。そんな面倒なことは、およそ考えられなかった。

だからこそ、東丈に対して狎なれなれしいと他人が思うほどの気易さで接近し、気兼ねなく東君呼ばわりで顰蹙ひんしゅくを買いながらも、伸びのびと振舞ふるまうことができたのであろう。およそ郁江には底